



〔自伝小説〕

わが道を求めて (第十三回)

父母の家庭教育

長崎 明

さしえ 竹内秀明

大きいことはいいか

一九七〇年代だったろうか。経済成長はなやかな頃、「大きいことはいかことだ」のコマーシャルがはやった。それは、消費者の要求心理と行動を巧みに誘い、経済主義・商業主義を開花させた。

それより三十数年も前、一九三四年（昭和九年）四月、台湾の片田舎「頂双溪」から台湾第一の大都会「台北」に移り住んだ私たち一家を待っていたのは、このコマーシャルのように、なんでもかんでも「大きい」の一点ばりだった。



まず驚いたのは小学校の大きいことだった。私が転入した旭小学校は、一クラス四十人、一学年六クラスの六年生だから、全校生徒一四四〇人、それに先生の数を加えると優に二千人を超える大所帯であった。

頂双溪では全人口がほぼそれくらいで、そのうち内地人はせいぜい五十人、小学校は全校三十人そこそこの複式学級だった。私のような病気がちの、痩せて小さくって泣き虫で、おまけに妙に意地っぱりなところのある子供でも、田舎の小さな小学校だから何とかやってこれた。五年生になったとはいえ、まだ、しょっちゅう寝小便をたれていた私にとって、大都会の大きな小学校は大変なショックだった。

旭小学校は鉄筋コンクリートの三階建てで、各階に広い廊下があり、廊下のところどころに水飲み場がついていた。二クラスにいか所くらいだったろうか。双溪小学校の木造建てと違って、鉄筋コンクリートの建物は乾燥して喉がよく渇くので、同級生は休み時間になるとしきりに水を飲みに行ったが、私は座席に座ったきりで離れることが少なかった。私たちの教室は二階の一番端っこにあつたので、廊下に出ると向こうの端がはるかに遠く見えて薄気味悪かった。五年生六クラスが男生徒と女生徒の半々に別れて、はっきりと男女別学になっているのも馴染めなかった。

同じクラスの何人かは、廊下を駆け抜け、向こうの端を探険してきて、「ウム、くさい、くさい」など、ほざく奴がいたが、何がくさいのか、私には分からなかった。後に気が付いたのだが、低学年のうちは男女共学だったので、かつて同級生の女生徒が、それなりに女らしくなってきたということらしかった。

女生徒どころか、上級生からも下級生からも隔絶された同年令の男生徒だけのクラスは、誠に殺伐たるもので、喧嘩が絶えず、時には刃傷沙汰さえあって、新参者の私を驚かせた。

ある時、クラス一腕白者のA君が、教室へ持込み禁止のジャックナイフを持ってきて、みんなに見せびらかした。うらやましがったB君が「そんなナイフ、切れるもんか」とはやしたてた。A君は「絶対よく切れる」とがんばった。証拠を見せるとのB君の声に、かとなったA君は「おれの指を切って見せる」と息まいた。「切れるものか」・「切って見せる」の暫しのやりとりの後、「ギャッ」との声ならぬ声とともに、A君は自らの左手親指にナイフを振り下ろした。吹き出す血の赤さ。誰かが大急ぎで先生を呼びに行つて、なんとか事なきをえたが、田舎から出てきたばかりの私は、ただ震えているばかり。悪夢のような一瞬だった。私たちのクラス担任は五十嵐という先生で、真面目



台北市街地図（現況に戦前の名称を貼付）

現況地図は昭文社、世界地図18「台湾」による。

一本やりのため「いがらし、からし、とんがらし」と呼ばれていた。私の両親によると、福島県の人ではないかという。田舎から出てきて算術の計算が遅れている。私を、授業が終わってからも遅くまで残して教えて下さった。例えば、「 $1 \sim 11$ の答えを小数点以下二位まで求め、その余りを出せ」というのに、私はどうしても「答 8.2 の余り 0.01」としてしまった。それから、「四捨五入して小数点以下二位まで求めよ」というのと、「小数点以下二位を四捨五入せよ」というのが区別できなかった。五十嵐先生の特訓のおかげで、新入の一学期末に六十点そこそこの算術が学年末には八十点にまでなることができた。理工系の学問領域を選んで今日に至ったのは、先生の教えのたまものと今でも感謝している。

「一本やりのため「いがらし、からし、とんがらし」と呼ばれていた。私の両親によると、福島県の人ではないかという。田舎から出てきて算術の計算が遅れている

私を、授業が終わってからも遅くまで残して教えて下さった。例えば、「 $1 \sim 11$ の答えを小数点以下二位まで求め、その余りを出せ」というのに、私は

虫くだし事件

生活環境が急変したためであろう。私の寝小便是ますますひどくなって、ほとんど毎晩のように布団に世界地図を書いた。顔色も優れず、子供らしい覇気がなくなってきた。母は、私のおなかに虫が湧いたのではないかと心配して、虫くだしを飲ませてくれた。何とかという海草を原料とする駆虫薬だった。その頃、子どものおなかの寄生虫としては回虫、ぎょう虫、さなだ虫などが多く、小学校の理科の教科書にもちゃんと出ていた。回虫が一番ポピュラーで駆除もしやすく、薬を飲むと翌朝の排便と一緒に虫も出てくるのが普通だった。

ところが、その時はさっぱり出てこないで、おなかに湧いていなかったのだらうと安心して登校した。それが失敗のもとだった。昼休時間に尻の穴がむずかゆくなってきた。同級生たちが向こうの方でわあわあど騒いでいるのを幸い、そっと手をやってみると、紐のようなものがうごめいている。「しまった」と思ったがもう遅かった。これが本当の虫の息なのだ、回虫はまだ生きていて、ひとりでに這い出してきた。私はたまたまなくなって、尻に手をあてがったまま廊下に

飛び出し、例の水飲み場にたどり着いたとたん、短ズボンの裾から紐がおっこちた。

めざとい奴がいて「長崎君、どうしたんだ」と追っかけてきた。私は、見せてはならじと、素早く拾い上げるや、ポケットにねじ込んだ。くだんの友人は好奇心にかられて「見せろ、見せろ」と騒ぎたてるが、見せられる代ものではない。とうとう大勢が私の回りに集まってきた。私はたまたまらず、遂にしゃがみこんで泣き出してしまった。例によって、しくしくと、しゃくり上げながら声をひそめて泣くやつである。

騒ぎを聞き付けて、五十嵐先生が飛んで来られ、「どうした、どうした」と訊ねてくださるのにも答えず、「それなら、きみ、もう帰るたまえ」にほっとして、帰宅はしてみたものの、ポケットの虫の始末に困ってそっと取り出したのを、どういう心理なのか、庭に放し飼いのニワトリに放り投げたら、べろべろと平らげてしまった。十五センチはあるでかい奴だった。またぞろ、私は同級生の間の変わり者にされてしまった。両親には全く聞かせなかった。

双溪小学校だったら、一つ年下だが私よりもたくましい妹が傍らにいて、「兄さん今日も泣いたよ」と母に言いつけただろうが、大きな学校では、兄・妹もバラバラにされてしまった。

塾に劣らぬ特訓

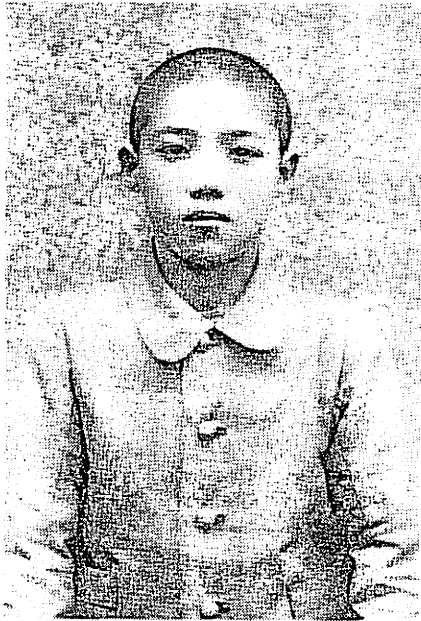
転校後の私がいろいろと思い悩んでいるのを知ってか、知らずでか、父は二期期から私の勉強の特訓を始めた。父も永楽公学校という台北第一の名門校に転動して来て多忙のはずだったが、私の成績が思わしくないのでに痺れを切らして、夕食後の一時間ほどを私のために割いてくれた。父は漢字の書き順に厳しかった。国語のノートや更半紙に、同じ字を同じ書き順で、きちんと書けるようになるまで何百字も書かせられた。父はもともと字の上手な方だから、毛筆での書き方も特訓したかったに違いないが、私の不器用さにあきれ果てたのか、新年の書き初め以外にはやかましく言わなくなつた。

算術では、三角形、平行四辺形、梯形（台形）、円などの図形の面積の出し方や、植木算などの計算の仕方を暗記させられた。「三角形の面積は底辺かける高さ割る二」の類である。現在は小学生の時から、 $A \cdot a$ や $l \cdot h$ や $x \cdot y$ などの記号を使って抽象化し、思考力を重要視しているから、丸暗記の必要性は私たちのころほど高くないだろうが、それでも一定のことは暗記しなければなるまい。

私は頭が小さくて脳味噌の記憶容量が少ないのか、暗記は今でも苦手である。もっとも最近では年齢から来る「忘れやすさ」で、子供の頃とは次元が違ってくるが、幼少の時から、理屈ぬきにただ覚えたことは、すぐ忘れてしまつたのであった。国語、算術、理科、歴史、地理、修身、音楽に至るまで、理屈よりも暗記物として教え込まれたのは、私の最大の不幸だったと今にして思うことがある。

歴史では「ジンム、スイゼイ、アンネイ、イトク、コウショウ、コウアン、コウレイ、スジン、スイニン、ケイコウ、セイム、チュウアイ、ロー」といった調子の丸暗記（思い出すまま）。合っているか調べてみようとしたが、そんなことを書いた本が最早手もとに無くなつてしまった。「カンヤマトイワレヒコノミコト」だの「ホトタライススギヒメ」だの、変なのを案外覚えていゝものである。「一二六七、推古の十五、小野妹子が隋に行き」は今でも忘れない。歴史の専門家の中には、例えば、「江戸幕府の始まり」というと、「一六〇三年、慶長八年、徳川家康、征夷大将軍となり江戸に幕府を開く。この年、江戸の日本橋架橋さる」のように、すらすらと出てくる人がいる。私と頭の構造が違うのではないか。

私には、何か、きっかけが必要である。中学校に入っ



台北一中、受験用の写真
(1936年2月)

てのことだが、二の平方根は「ひとよ、ひとよに、ひとみごろ」で、一、四一四二一三五六を思い出す。三は「ひとなみにおごれや」、五は「ふじさんろくにオームなく」、六は「にょよくよく」、七は「なにむしいない」だが、今は計算機でボタンを押せば即座に答えが出るから、一々覚える必要があるのか、折りがあったら数学の先生に聞いてみたい。きっと、いつでもそばに計算機があるとは限らないから、覚えておいた方がよいというに違いない。日本人が暗算に強いのは掛け算の九九と算盤のせいだと聞いたことがある。確かに、原始的と思われる方法が近代化の基礎になっている

るといふ自明の理が、ここでも通るようである。

少年時代の私は、まだ学習塾のなかった頃にもかかわらず、現在の塾に劣らぬくらい、学校でも家庭でも特訓に継ぐ特訓を受け、歯を食いしばってでも頑張ることを叩きこまれた。

歌に託して

漢字を覚えるにも「ヒヤ(矢) マフトヒト」で「疑」というように我流で文句を作った。これは、当時はやっただ小話に「平林」の読み方を「タイラバヤシカヒラリンか、一八十のモクモクさん」といって覚える一節があったのにヒントを得たのであった。大人たちが特訓をやってくれているのに、当の本人は案外こんなことでストレス解消をやっていた。

広く歌われたのに

櫻(さくら) という字は ネエ千代ちゃん

二階の女が気にかかる 気にかかる

ヤッコライノヤイ

努力の「努」の字は ネエ 千代ちゃん

女の又に入る力 入る力 ヤッコライノヤイ

といった怪しげなものもあった。男生徒はともかく女生徒はまさかこんな歌を使わなかったであろう。もっと

も男生徒もどれくらい意味をわきまえていたか。昔の小学校五年生のことである。

もう一つ、忘れられない歌がある。肉弾三勇士の歌である。

昭和七年如月の二十二日の朝まだき

残月かかる大空を見上げて誓う三勇士

この歌は、前年の満洲事変、その年の上海事変と、中国大陸への抜き差しならぬ侵略戦争に国民を駆り立てるために、政府が作った美談に由来するとされている。事実、私たちは修身の授業で、肉弾三勇士が敵の鉄条網を爆破するために爆弾を抱えて前進し、遂に味方の突撃路を開いた様を目に見えるが如く聞かされ、その忠烈無比に感動させられた。

満洲国はこの年三月一日に建国を宣言した。私たちはこの歌でそれが「昭和七年」なのを覚え、如月を「きさらぎ」と読み、それが二月なのも知った。肉弾三勇士の歌はこの他にも幾つかあったが、歌詞を覚えていたのがこれだけなのは、子どもなりの実用性があったからというべきか。さはあれ、私たち子どもが次第に軍国主義少年へと鍛えられてゆく第一歩であった。

教育勅語

当時の修身は忠君・愛国を教える重要な科目であった。修身の授業の大部分は教育勅語の解説だったような気がする。修身の時間には先生もひどく緊張していたようだった。まれには校長先生が教室にまで出かけて特別の訓話をする事があって、日頃威勢のよい五十嵐先生も小さく見えた。

山住正己「教育勅語」朝日選書（一九八〇年発行）によれば、「教育勅語発布の後、政府は勅語の精神を主として学校を通して国民に普及していくこととし、どの学校でも、少なくとも三つの方法がとられていた。第一は祝祭日の儀式における校長らによる捧読（ママ）と訓示、第二に毎日行われる勅語に向かっての拝礼、第三に修身の授業などで行われる注釈であった。」という。

植民地の台湾では、これらが殊更厳格に守られていたのは当然であった。小学校六年生では修身の時間に教育勅語の全文を暗記させられたり、特別に真っ白な上質半紙に毛筆で清書させられた。また、教育勅語や御真影をお祀りしているという奉安殿が校庭の一隅にあって、その前を通るときは必ずお辞儀をするように

仕付けられたが、私たち生徒は敬遠して、なるべくそちらに行かないようにしていた。

祝祭日の式の度に校長先生がおっしゃることは、「私たち臣民はひとしく天皇陛下の赤子（せきし）である。親孝行するのも、兄弟仲良くするのも、友達どうし信じあうのも、勉強するのも、体を鍛えるのも、すべて一旦緩急あるとき、天壤無窮の皇運を扶翼せんがためである。」

に決まっていた。教育勅語体制下では知育、徳育、体育のうち徳育が最優先され、知育もまた思考力より暗記第一主義で、体育までが天皇の赤子たるためであつ

た。

しかし、中学校への受験勉強に夢中になっていた私は、問題集を見て、何とはなしに教育勅語が試験問題とは関係ないと悟って、本気になって聞いていなかった。緊張感が欠けると、もともと身体の丈夫でなかった私は脳貧血を起こして倒れ、五十嵐先生に抱き抱えられて式場外へ運び出されるのが常だった。

私は本当は工業学校に入りたかった。工業学校の開学記念祭で、図形の縁を針でぐるぐる回しただけで面積が出てくる器具（プランメーター）を見て以来、あれがあれば面積計算式を覚えなくて良いと思い、「僕は工業に行く」と一人決め込んでいた。家計の関係から進学を諦め苦勞してきた父は、どうしても中学校、それも台湾で一番難しい台北一中に入れということだった。（ながさき あきら）に

朕惟^ニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ
 億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾
 臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習
 ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急
 アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナ
 ラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
 斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ踴ラス之
 ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

山住正己「教育勅語」

（朝日選書による）

は工業に行く」と一人決め込んでいた。家計の関係から進学を諦め苦勞してきた父は、どうしても中学校、それも台湾で一番難しい台北一中に入れということだった。（ながさき あきら）に

いた眞民教育研究所理事長